講演要旨

生命尊厳の哲学を根幹にしたAI活用を目指して

創価女子短期大学教授
亀田多江

現在、広くAI（人工知能）が活用されるようになり、第4次AIブームの幕開けともなる「新しい時代」に入った。高等教育の現場でも、AIを日常的な学習ツールとして活用することで、情報収集や思索・検証、アイデア整理、資料作成など質の高い学びができるようになった。ビジネス現場においても、AI技術の導入で、業務の効率化から、新たなサービスの創出にまで至っている。更には、グローバル社会の諸課題の変革と解決にも、AIに広く期待されている。一方で、AI活用の倫理的側面、軍事利用の問題など、人権や生命の脅威となる問題が喫緊の課題となっている。この高度な科学技術 AI がもたらす行き詰まりや矛盾をどう乗り越えていくか。対談集『科学と宗教』[1]においては、「近代科学文明のさまざまな局面での行き詰まり、矛盾を乗り越えていくには、宗教の豊かな智慧を吸収すべきである」ことが述べられており、「人間のための科学でなくてはならない。そして人類の幸福のために役立つものでなくてはならない」と強調されている。

一方、AI の高度な発達により、人間の知性を超える技術的特異点（シンギュラリティ）が、2045 年に訪れることをレイ・カーツワイルが予言し、人々にAIへの期待と脅威を感じさせてきた。これに対し、東京大学名誉教授の西垣通氏は、この予言はあくまでも万物が神の被造物と考える西洋古来の形而上学に基づく思考から生じる仮説であることを指摘し、AI への過大評価に警鐘を鳴らしている[2]。そして、人間を機械化していく現在の流れを逆回転させ、生命尊重（人間尊重）につながる情報学こそが、真の情報学の使命ではないかと疑問を投げかけている[3]。

私自身、これまで「人を幸せにするICTの活用法」をテーマに、地域社会の現場で学び、課題を解決していく「実学・実践」の教育・研究に取り組んできた。岩手県での高齢者見守りネットワークシステムの取り組みでは、高齢者にインターネットを活用した毎日の「お元気発信」をしてもらうことで、地域の孤独死問題を解決し、高齢者と地域との繋がりも育むことができた。病院・ベンチャー企業と連携した「高齢糖尿病患者の在宅インスリン療法見守りシステムの開発」では、患者の在宅療養状況を見える化し、安心して療養できる環境を提供することができた。更には、高齢者福祉施設や保育園、小学校の特別支援学級などで、コミュニケーションロボットの活用研究を学生と共に、現場と連携しながら実践的に行ってきた。その中で、人でもなく、単なる機械でもないロボットだからこそ、温かみを感じながら、気兼ねなく心を許せる存在として、対人以上に人の力を引き出し、課題を克服し、人に幸せをもたらす道具として活用できたいくつものエピソードが生まれ、ロボットの可能性を強く感じてきた。

本講演では、生命尊厳の仏法哲学を根幹に、人の幸福のために情報技術をどう活用していくことができるかを探求し実践してきた取組みを紹介しながら、生命尊厳の哲学を根幹にした AI 活用について共に考え深めていきたい。

[1]池田大作、アナトーリ・A・ログノフ『科学と宗教』潮出版社、1994 年 4 月
[2]西垣通、河島茂生『AI 倫理』中央公論新社、2019 年 9 月
[3]西垣通『情報学的転回』春秋社、2005 年 12 月